

---

# 海賊戦隊ゴーカイジャー v s 仮面ライダーディケイド

六甲水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海賊戦隊ゴーカイジャーvs仮面ライダーディケイド

### 【Nコード】

N3377W

### 【作者名】

六甲水

### 【あらすじ】

オルタナリーンの達の野望を食い止めるため、士達は写真館の絵に現れた二枚の絵のうち、海賊船が描かれた世界へと士、ユウスケ、夏海、海東、マミ、ほむらは向かった。

一方その頃、ゴーカイガレオンではナビィの占いに『世界の破壊者』と出る。

海賊と破壊者が出会う時、物語は動き出す。

## 第一話 訪れた世界（前書き）

というわけで続編がやっと出来ました。今回はまだゴーカイジャ  
ーと出会いません。但し、あの戦隊と再会です。

## 第一話 訪れた世界

レジェンド大戦。それは宇宙帝国ザンギャックの船団と34のスーパー戦隊達の戦いである。スーパー戦隊はザンギャックとの戦いでその力を失う。だが、そんな34のスーパー戦隊の力を受け継いだのとんでもない奴らだった。そのレジェンド大戦が起きる二年前、全てのライダーの力を受け継ぐ戦士が存在した。

海賊戦隊ゴーカイジャー vs 仮面ライダーディケイド

とある日の事だった。鎧からもらったスーパー戦隊図鑑を眺めていたゴーカイグリーンことドン・ドゥゴイヤー、通称ハカセとゴーカイピンクことアイム・ド・ファミーユの二人がある写真を見ていると、

「ねえ、鎧。これって何ていう戦隊なの？」

「えっ、どれですか？」

鎧はハカセが指さした写真を見るとその写真には、侍戦隊シンケンジャーとともに戦うマゼンタカラーの戦士が写されていた写真だった。

「ああ、それは一度だけシンケンジャーと戦った戦士ですよ。ほら、ここにももう一人の戦士がいるでしょ、」

そう言つて、もう一枚の写真をハカセたちに見せた。そこには赤いボディに赤い目の戦士の姿だった。

「へえー、こんな人達もいたんだ。」

「何てお名前なんですか？」

アトムが鎧に写真に写った戦士のことを聞くと……

「えつとですね。確か……………あれ？なんだっけ……………ディ……………あれ？」

名前を思い出せずに悩む鎧。すると、ゴーカイレッドことキャプテン・マーベラスがオウム型ロボットのナビィに……………

「よし、今日もお宝探しに行くか。おい、鳥。」

「もう、鳥じゃないって、レッツお宝ナビゲート！」

早速ナビィが占いを始めた。目を様々な色に変えながら、部屋を飛び回る。そして、壁や天井に頭をぶつけながら、出た占いの結果は……………

「汝らの探しもの、世界の破壊者が鍵を握っている」

「……世界の破壊者？」

マーベラス、ジョー、ルカ、ハカセ、アイムの五人が同時に言った。

「世界の破壊者ってザンギヤツクのことでしょうか？」

「でも、スーパー戦隊の大いなる力でしょ、何でアイツらが関係してるのよ」

ルカがアイムが言ったことを否定すると、突然鎧が大声を出した。

「あーあー、思い出したあああーあー」

「ひるんひるん…」

突然大声を出した鎧を思いっきり叩くルカ。すると、マーベラスが

……

「何だ鎧。何を思い出したんだ？」

「さっきドンさんとアイムさんが聞いてきた戦士の名前ですよ。」

「何だ。そんな事か」

てっきり占いの答えだと思ったマーベラスだったが、

「さっきの占いで思い出しました。あの戦士は仮面ライダーディケイド、別名世界の破壊者ですよ。」

「なるほどな。仮面ライダーか。大いなる力の手がかりだ。探しに行くぞ。鎧。どこにいけばそいつに会える」

「え、さあ、現れたのが二年まえですから……そうだ、シンケンジャーと共闘してたんですから、シンケンジャーの人達に聞けばいいんですよ。確か近くにシンケンゴールドがやっている屋台があったはずですよ。」

一方その頃、ディケイドこと門矢士たちは……

「ここが新たな世界か。」

「それにしても、この世界は一体何なんでしょうか？」

「きっと、あのシンケンジャーと似たような世界だったりし、」

仲間の二人である小野寺ユウスケ、光夏海がそういうと、夏海の隣にいる黒髪の少女暁美ほむらがつぶやいた。

「それにはやつら、オルターの一味がいるはず。………まどか」

ほむらは親友である鹿目まどかをオルター一味に攫われ、搜索の途中にオーズ達と合流したのだった。すると土がほむらの頭を軽く触れた。

「安心しろ。あいつらを捕まえて、お前の親友を探そうぜ。」

「………ディケイド。それより、あなたのその格好一体？」

この世界に来た土の格好は何故かマゼンタカラーのはんてんを身に纏い、さらにはおでん屋の屋台が用意されていた。

「さあな、どうやらこの世界での俺はおでん屋みたいだな。」

「あの、ちょっといいですか？」

ユウスケの隣にいる巴マミが土に話しかけてきた。

「何だ？」



「いえ、先程から海東さんの姿が見えないのですが……」

士は辺りを見渡すと確かに海東の姿が見当たらなかった。

「どうせ、お宝探しに行ったんだろ。」

「あああーーーーー」

突然ユウスケが大声を出す。

「今度は何だ？」

「あ、あれって、」

「あれ？」

士達はユウスケが指さした方を見ると、そこには小さな屋台があった。そして障子に書かれていたのは……ゴという文字だった。

「あれって、シンケンジャーの一人の……」

「シンケンジャーの世界だったのか。ここは、」

「とりあえず、会いに行ってみましょう。」

士達は屋台へ近づく。屋台を引きながら……

屋台にはシンケンジャー全員が集まっていた。

「いやー、こうして皆で集まるのってレジェンド大戦以来だな。つっても、千秋とは黒十字王が現れた時に一度会ったけどな」

「あん時は大変だったな。」

「そういえば、姫様が今噂の海賊に大いなる力渡したらしいじゃないか」

「ああ、母様が彼らを認めただ。俺はその決定に納得しているからな。」

「まあ、レジェンド大戦があっただ。力を失った俺達にはアイツらに平和を守ってもらっしか無いよな」

「そうだな。」

「あれ？あれなんやろ」

と髪を二つに縛った少女、花織ことはがゴールド寿司の目の前にある屋台に目をやった。

「おでん屋かしら？」

ことはの隣に座る白石茉莉が言うと、源太は……

「俺の店の前で屋台開きやがって、営業妨害か？注意してやる」

そう言っつて、源太が目のおでん屋に向かった。文瑠たちもため息を付きながらその後を追った。

「おい、人の店の前で勝手に……………」

「いらっしやい。」

「「あ、」

「「？」

そこにはおでんを作っている土と、のんびりとおでんを食べているユウスケ、夏海、マミ、ほむらがいた。すると源太の後ろから……

「あああ——、ディケイド。」

と大声を上げるのは池波流ノ介。すると丈瑠が土の前に出た。

「門矢士。」

「久しぶりだな。殿様。」

「いつ、この世界に来た？」

「ついさっきだ。それよりいくつか聞きたいことが……」

士が何かを言いかけた瞬間、どこからともなく悲鳴が聞こえた。全員が外に出ると……

「何だアイツらは……アヤカシか？」

人々を襲っていたのは青いロボットみたいな怪人が五体。白い兵士みたいなものが二十体。そして、それらを率いている背中に二本の刀を装着し、腰には四本の刀を差した紅い怪人がいた。

「ここは今からザンギヤックの占領下置く。人間どもは全員、捕獲し下僕として働かせよ！」

「ザンギヤック!?」

「なんだアイツらは……」

士が丈瑠に聞くと、源太がかわりに答えた。

「宇宙帝国ザンギヤック。この地球を征服しようとしている奴らだ。」

「

「なるほどな。シンケンジャーの今の敵は、そのザンギヤックか。」

「いや、俺達に戦う力はない。」

「えっ、それってどういうことですか？」

文瑠から出た言葉を聞いて、驚く夏海。するとザンギヤックが土達に気がついた。

「その人間。大人しく我らに掴まれ。」

「仕方ない。ユウスケ、マミ、ほむら、行くぞ」

「分かった。」

「分かりました。」

「任せて、」

士はディケイドドライバーを腰に装着し、ユウスケは腰に手をやり、ベルトを出した。マミとほむらの二人は指輪を取り出した。

「「変身！」」

『カメンライド・ディケイド』

士はディケイドに変身、ユウスケはクウガに変身し、マミとほむらは魔法少女に姿を変えた。

「むっ、姿が変わった。そうか、分かったぞ。貴様も海賊どもの一味だな。」

「海賊？違うな。通りすがりの仮面ライダーだ」

「仮面ライダー？ええい、意味がわからん。貴様らはこの行動隊長スサノオが相手する。いけ、ゴーミン共」

「さて、行くぞ」

## 第一話 訪れた世界（後書き）

次回、仮面ライダーディケイドvs海賊戦隊ゴーカイジャーは

「このスサノオ様の刃を受けよ」

「そっちが刀を使うなら、こっちは剣だ。」

『カメンライド・ブレイド』

ディケイドvsザンギャック。その戦いに乱入者が現れる。

「ここまで追いついてくるなんて……そんなに君の親友は大切なのかい？」

「オルターリン！」

現れるオルターリン。そしてオルターリンが放った血の魔方陣

「グオオオオオオオオ」

「馬鹿な。ドウコクが蘇っただと。」

「私の大切な兵隊だ。私の言うことをよく聞くように……理性はなくし、戦うための戦士に生まれ変わった。」

蘇るシンケンジャーの因縁の相手、血祭りドウコク。

「面白いことになってんじゃねえか。」

「一般人は下がってる」

ついに会ったゴークイジャーとディケイド。

次回『血の仮面ライダー』



## 第二話 血の仮面ライダー

ライダーに変身した士たちは、ザンギヤックの部隊に攻撃を仕掛けた。

「マミ、ほむら。お前らは雑魚を頼んだ。ユウスケは俺と一緒にあの刀野郎をやるぞ。」

「ああ、任せろ。士。」

「行きましよう、暁美さん。」

「……………ええ、」

ほむらとマミの二人は、ゴーミンの集団と戦いを仕掛ける。

「それじゃあ、まずは、これで行きましよう」

マミは帽子から何十個のマスケット銃を取り出し、ゴーミンの集団に銃弾を放った。

「う、う」

「まだまだ行くわよ。」

マミは高く飛び上がり、空中で無数のマスケット銃を召喚させ、ゴーミンの集団に一齐に攻撃を放つ。大量にいたゴーミンは残り10人となった。

残ったゴーミン達はマミ相手に接近戦で何とかしようと思いつき、マミに接近しようとしたのだが、マミの近くに寄ろうとした瞬間爆発した。

「そこに地雷を設置したわ。」

涼やかな顔をしたほむらが手に持っていた筒をゴーミンへ投げる。  
ゴーミンはそれを受け取ると……

「コレハ……」

「爆弾よ。」

その瞬間、一気に残ったゴーミン達は爆発に巻き込まれるのであった。

「ぐぬぬ、ゴーミンたちを倒すとは……だが、この行動隊長スサノオがいる限り、貴様らに勝利はない。」

スサノオとスゴーミンがディケイドとクウガの前に立ちはだかる。

「ユウスケ、あの青いやつ任せられるか？」

「ああ、任せろ。」

クウガはスゴーミンに戦いを挑んだ。そしてディケイドは……

「さあ、行くぜ。行動隊長とやら、」

「ふん、貴様なんぞすぐに斬りせてくれよう。」

スサノオが背中に差した二本の刀を抜き、ディケイドに斬りかかった。ディケイドはその刃をライドブツカーの剣で受け止めるが、

「そのような軟弱な剣で、私には勝てないぞ。」

スサノオはディケイドの剣を弾いた。ディケイドは後ろへ下がった。

「見掛けと違って強いな。」

「さあ、仮面ライダーとやらこのスサノオ様の刃を受けよ。」

スサノオがディケイドに斬りかかる。それを見たディケイドは一枚のカードを取り出した。

「そつちが刀ならこつちは剣だ」

そのカードをディケイドライバーに挿し込むと、ディケイドの姿が

みるみるうちに変わった。

『カメンライド・ブレイド』

剣の戦士仮面ライダーブレイドに変わったディケイドはスサノオの攻撃を剣で受け止める。

「ぐぬぬぬ、姿を変えるとは……………やりおる。」

「姿だけじゃないぜ。」

さらにもう一枚のカードをディケイドライバーに挿し込む。

『ファイナルアタックライド・ブ、ブ、ブレイド』

ディケイドは高く飛び上がり、足に雷が付和され、スサノオに向かって蹴りを喰らわせようとした。スサノオは二本の刀でそれを防ぐが、刀にヒビが入りだした。

「ま、まさか、ここで負けるというのか。」

ディケイドも勝利を確信した。だが、それは突然襲いかかった。ディケイドに向かって紅い矢が何百発も降り注いだ。

「ぐああああ」

「な、何が起きた？」

「全く私の商売人を倒そうとするなんて、危ないわね。」

どこからとも無く女性の声が聞こえ、ディケイド達が声が聞こえた方を見ると、そこにはオルターリーンがいた。

「ここまで追いついてくるなんて……そんなに君の親友は大切なのかい？」

「オルターリーン！」

ほむらはオルターリーンの姿を見た瞬間、時を止め、銃弾を何発も放つ。だが、

「時を止めるなんて小技で私に勝てるなんて思ってるの。」

オルターリーンの声が聞こえた瞬間、ほむらの時止めの魔法が消え、ほむらは肩を斬りつけられた。

「くう、魔法が……」

「魔法少女の魔法なんて、貴方の親友の力を得た私の前では無意味よ。」

オルターリーンは手のひらに埋めたピンクの宝石を見せた。それはソウルジェムに似ていた。

「ま、まさか、あなた……」

「さすがに別次元からインキュベーターを探しだすのは疲れたわ。それに別次元のあなたの親友もね。大丈夫よ。貴方が知ってる鹿目まどかはまだ生かしてるわ。」

「オルターリーン！」

「落ち着け、ほむら。やつと思う壺だ。」

オルターリーンに飛びかかろうとしたほむらを制すディケイド。ディケイドはオルターリーンを睨んだ。

「お前、この世界で何をするつもりだ。」

「さあ、教えるわけには行かないわ。邪魔されたら嫌だもん。だから……貴方には私の兵隊で遊んでもらうわ。ブラッティーサモン」  
オルターリーンが自分の血を地面に流すとそれは血の魔方陣となり、そこから紅い怪物が姿を現した。離れた場所で見えていたシンケンジャーはそれを見て驚いた。

「ま、まさか、あれは……血祭ドウコク。」

「グオオオオオオオオ」

「私の大切な兵隊だ。私の言うことをよく聞くように……理性はなくし、戦うための戦士に生まれ変わった。」

それはシンケンジャーがやっとの思いで倒した外道衆の首領、血祭ドウコクであった。ドウコクはディケイド、クウガに向かって紅い斬撃を放った。

「ぐあああああああああ」

「さすがは最強の外道衆。さあ、もっと暴れなさい。」

倒れたディケイドたち。ドウコクは一步ずつディケイドに迫っていた。

「さすがに外道衆の首領は強い。」

「どうするんだ？士？」

どうするか話しあう二人。だがドウコクはさらに攻撃を仕掛けようとした瞬間、突然誰かが撃った銃弾がドウコクに当たった。ディケイドたちが見るとそこには六人の姿があった。

「面白いことになってんじゃねえか。」

「ザンギヤックに妙な奴らがいるな」

「いいんじゃないの？いつも通りで」

「って、ルカ、あの紅い怪物明らかに今までの敵とは大違いだよ。」

「そうですわね。それにあのマゼンタカラーの人って……」

「ああーディーケイド。あれがディケイドですよ。それになん  
でドウコクが……」

「何でもいい。行くぞ」

六人は一斉に鍵みたいなものと携帯電話みたいなものを取り出し、  
鍵を差し込んだ。

「ゴークゴークゴークゴーク！」「ゴークゴーク」

六人が一斉に掛け声をした瞬間、赤、青、黄色、緑、ピンク、銀の戦士に変身した。デイケイドは彼らを見て気がついた。

「なるほど、あいつらがゴークカイジャーか」

「さあ、派手に行くぜ！」

ゴークカイジャーの変身を海東は遠く離れた場所で見っていた。

「なるほど、あれがこの世界のお宝レンジャーキーの力か。さて、



僕は彼らの船から鍵を奪うとするか」

海東がそう言いながら、ゴーカイジャーがいる場所からそう離れていない場所に浮かんでいるゴーカイガレオンを見つめた。

「さて、行くとしますか。」

「おっと、そうはさせない！」

突然海東の周りに出現したブロンズ色の戦士・デカマスター。金色の戦士・ズバーン。黒獅子の異名を持つ戦士・リオが海東を囲んだ。そして海東の前に現れたのは……

「仮面ライダーの大なる力貰いに来ましたー」

「キキッ」

海東の前に現れたのは紅いコートに黒い帽子を被った男・バスコと相棒のサリーだった。

「どうやら君は僕の邪魔をするみたいだね。」

「邪魔？俺は君とあそこで戦っている仮面ライダーが持っている大なる力を奪いに来ただけ。君のジャマをするつもりなんてないさ。ただ、大人しく力を渡してくれないと……力づくになるだけだから」

「それが邪魔をしているということだよ。変身！」

『カメンライド・ディエンド』

「じゃあ、みんなやってしまいな」

デイクイドvsオルターラインの戦いの裏で、バスコvsディエン  
ドの戦いも始まるのであった。

## 第二話 血の仮面ライダー（後書き）

「お前もザンギヤックか？」

「なるほどな。お前らがこの世界の戦士か。」

ディケイドvsゴーカイレッド

「ドウコクを倒すために、一度俺たちの力……シンケンジャーのレンジャーキーを返してくれないか？必ず返す」

丈瑠の突然の提案。

「どうだい？ザンギヤックにとっては邪魔なゴーカイジャーを潰せて、バスコくんにとっては全てのレンジャーキーと大いなる力をもたらえる。良い条件だろ」

ザンギヤックとバスコと手を結ぶオルターリン。

「……まさか……あなたは……」

「久しぶりだね。暁美ほむら」

ほむらの前に現れたものとは……

### 第3話 退くオルターリイン（前書き）

お待たせしました。第3話です。今回で一戦目は終わる予定です。  
まだフォーゼ、オーズ、Wのものは第1話が書き上がってませんが、  
10月中にはあげられるようにします。

### 第3話 退くオルターリーン

オルターリーンが呼び出した血祭ドウコクの前に苦戦をしていた。デイケイド達。だが、その前に六人の戦士、ゴーカイジャーが現れた。オルターリーンはゴーカイジャーたちを見つめると……

「どうやらこの世界の本来の戦士たちが現れたみたいだね。だけど……バーサーカードウコクの前に君たちは戦えるのかい？」

「ガアアアアアアアア」

ドウコクが雄叫びを上げながら、ゴーカイジャーたちに攻撃を仕掛けてきた。

「なんだ？あいつらもザンギヤツクなのか？」

「それにしても、今までの奴らとは少し違うみたいだな。」

ゴーカイレッドとゴーカイブルーがドウコクとオルターリーンを見つめるが、ゴーカイシルバーはドウコクを見て驚いていた。

「って、あれって、シンケンジャーの宿敵、外道衆の首領、血祭りドウコクですよ！確かシンケンジャーのみなさんがやっこの思いで倒したはずなのに……」

「それでしたら、シンケンジャーで行きましょう！」

ゴーカイピンクがそう提案すると、全員がバツクルからシンケンジャーのレンジャーキーを取り出し、モバイレーツにレンジャーキー

を差し込んだ。

「ゴークカイチェンジ!!!」

『シーーンケンジャー!!!』

六人の姿は掛け声と共に変わり、シンケンレッド、シンケンブルー、シンケングリーン、シンケナイエロー、シンケンピンク、シンケンゴールドに姿を変え、シンケンマルとサカナマルでドウコクの太刀を受け止めた。

ゴークカイジャーの戦いを見ていたオルターリーンは不気味な笑みを浮かべていた。

「なるほどね。あれがレンジャーキーとゴークカイジャーの力か。確かに興味深いけど……あれを放っておくとあとあと私たちの計画の邪魔になるからね。今のうちに……」

オルターリーンがゴークカイジャーたちに血の槍を投げつけようとした瞬間、オルターリーンの頬を一発の銃弾が掠めた。

「隙を見せたわね。オルターリーン!」

「君もさっきの戦いを見ていないのかい？君の魔法は、君が大切にしている親友の力をもった私には効かない。それに、そんな銃で私を倒すなんて……無理だ！」

オルターリーンがどこからともなく取り出したナイフで自分の手首を切り、腰に装着したベルトに血を流し込むと真紅の仮面ライダーに変身した。

「さて、この形態で君と遊ぶのは悪くないんだけど……この世界は全部で34の悪の血が地面に流されてるから………何体かさらに追加しようか。ブラッディーサモン」

オルターリーンが血の魔方陣から新たに三人も召喚しようとしていた。だが、

『ファイナルアタックライド・デイデイデイ、デイケイド！』

空中からデイケイドの凄まじい蹴りでオルターリーンの魔方陣を破壊したデイケイド。

「俺がいることを忘れるなよ」

「まったく、本当にジャマをするのが好きみたいだね。しょうがない。ドウコク、それとザンギャックの行動隊長。今回は帰るとしようか」

クウガとマミと戦っていた行動隊長スサノオは……

「あん、お前が……」

「ほら、行くよ。」

スサノオとドウコクと仮面ライダーブラットは血の魔方陣の中に入っ  
ていき、消えていった。残されたディケイドたちは……

「どうやら、この世界にヤツが居るのは分かったな。一旦写真館……」

ユウスケ、夏海、ほむら、まみの四人に写真館に戻ろうと提案しようとした瞬間、ゴーカイレッドが士たちを呼び止めた。

「待ちやがれ、世界の破壊者」

「何の用だ？海賊。」

「お前に幾つか聞きたいことが……」

「だが、その前に俺たちの話を聞いてもらえないか？」

ディケイドとゴーカイレッドの間に丈瑠が割って入った。そして丈瑠はゴーカイジャー達を見て、ある提案をした。

「俺達に一時的にレンジャーキーを返してもらえないか？ドウコクが復活した以上、俺たちもただ見ているわけにはいかないのだ。」



一方、ディエンドvsバスコー味は……

『ファイナルアタックライド ディディディ、ディエンド!』

ディエンドライダーから放たれた閃光を喰らい、デカマスター、ズバーン、リオは元のレンジャーキーに戻された。ディエンドはその三つのレンジャーキーを奪おうとしたが、その前にバスコの相棒、サリーが回収した。

「人が拾おうとした瞬間に、奪うなんて……泥棒みたいだね。君は」

「おたくには言われたくないね。泥棒のライダーくん。」

二人は睨み合う中、デイエンドが先にバスコに攻撃を仕掛けた。デイエンドライバから放たれた銃弾はバスコに命中しようとしていたが、

「やれやれ、面倒臭い相手だ。」

銃弾が突然弾かれた。よく見るとバスコの前に赤いバリアが張られていた。

「しょうがない。まだマベちゃんには見せてない力を見せてあげよう。」

バスコがそう告げた瞬間、バスコの体が見る見るうちに紅い怪物に姿を変えた。

「なるほど、君は化け物か。なら、容赦はしないよ。」

### 第3話 退くオルターリーン（後書き）

まだ前回の次回予告分の台詞を行っていないので、今回は予告なしです。

## 第四話 集う悪（前書き）

第四話です。今回はザンギャックとバスコの二大組織にオルタリー  
ーンが……

さらにあのキャラが復活します。

## 第四話 集う悪

ゴークイガレオン

「なるほどな。あの紅い化物を倒すためにお前らにレンジャーキーをか……………」

マーベラスはダーツの矢を投げながら言うと、ソファアに座っていた丈瑠は……

「別にレンジャーキーを返してもらいたいという訳ではない。あれは母さまがお前たちを認めたからな。ただ、今回はドウコクが復活した以上、ヤツの強さに詳しい俺達が必要だと思う。」

マーベラスはダーツをやる手を止めた。すると凱はシンケンジャーのメンバーからサインを貰い終わり、マーベラスにあることを言った。

「マーベラスさん。力を貸してあげましょよ。今回はザンギヤック以外にも復活したドウコクやあの変な仮面ライダーもいるんですよ。俺達だけじゃ……………」

「……………分かった。レンジャーキーを一時的に返してやる。だが、お前らが言う宿敵を倒したら必ず返せよ」

「ああ、」

丈瑠、流、千秋、茉莉、木葉、源太の六人はレンジャーキーが入っている宝箱からシンケンジャーのレンジャーキーを受け取ると、レ

ンジャーキーはシヨドーフォンに形を変えた。

「これでシンケンジャーの皆さんと一緒に戦えますね。」

アイルムがそう言いながら、とある人物たちに紅茶を渡した。するとルカが……

「まあ、そっちは解決したけど、こっちの仮面ライダーたちはどうなのよ」

ルカが呆れた顔をしながら、船室を眺めている土、夏海、ユウスケ、マミの四人を見た。

「なるほどな。大体分かった。レジェンド大戦と呼ばれる戦いで、34のスーパー戦隊は力を失い、海賊たちが使っている鍵みたいなものにその力は変わったんだな。それでお前らはあのザンギャックという奴らを戦っている。」

「……………そういうわけだが、お前らが戦っていたあの血を使って戦っていた奴は何だ？ やつもお前と同じ仮面ライダーなのか？」

ジヨーが土に聞くと、土は……

「奴は異次元から来た仮面ライダーだ。名はオルターリン。オルターリンを含めて異なる世界から来たライダーは三人いた。やつらはそれぞれ、血、傷、魂の力をもっているらしいが、俺たちは奴らの目的も何もわかっていない。」

「異なる世界って……………ディケイド達がここにいること自体凄いの  
に、あんなに強そうな奴がいるなんて……………」

ハカセは弱気になりながら言っていた。そんな中、ふっとマミがほむらがないことに気がついた。

( 暁美さん。どこに行ったのかしら？ )

司令部旗艦ギガントホース

「ええい、どういうことだ。あのおかしな色をした奴らは！あれも海賊の一種か？」

ザンギヤック皇帝の息子で地球制圧の司令官ワルズ・ギルが怒りながら言つと、参謀長ダマラスがワルズ・ギルをなだめた。

「殿下。あの様な奴らこの宇宙では存在しません。ザンギヤックのデータベースでも載っておらず、何者かすらわかりません。」

開発技官インサーンはさっきの戦いの映像を見返していた。するとあることに気がついた。

「ワルズ・ギル様、あのおかしな色をしたものですが、どうやら海賊たちと同じ別のものへと変わる力を持っているみたいです。すぐに奴らに対処できるよう、スサノオを改造……………」

インサーンがそう提案した瞬間、突如、司令室の床に血の魔方陣が浮かび上がり、そこから二つの影が現れた。

「どうも、宇宙帝国ザンギヤックの皆さん。お初にお目にかかります。私、オルターリーンと申します」

突如現れたのはオルターリーンと鎖につながれたドウコクであった。オルターリーンが現れた瞬間、特務士官バリゾーグがオルターリーンに剣を振りかざした。

「ボスの命を狙うものか？」

「おっと、そう邪険にしないでくださいよ。私は皆様になんかしたお話をしに来ました。」



「ほう、バリゾーク。やめる。こいつの話聞いてみたい。」

「YESボス。」

ワルズ・ギルの命令でバリゾークは剣を鞘に閉まった。するとダマラスは……

「お待ちください。殿下！この女の話の話を聞くというのですか？」

「何、話を聞き次第で、気に入らなかつたら始末するだけだ。で、オルターリン。話とは？」

「ふふ、さすがは全宇宙を支配する王子。わかっていらつしやる。今回のお話は……あなた方にとって邪魔な存在である海賊どもを一網打尽にするというものです。」

オルターリンは笑みを浮かべながら、ザンギヤックにとある作戦を伝えると……

「なるほど、面白い。その作戦、キサマに任せる。」

「ありがとうございます。それと行動隊長の方を少しじらせてもらいます。」

とある街の屋上にはバスコとサリーがいた。

「全くあのライダー。どこに消えたんだか。」

「キキッ」

真の姿でディエンドと戦っていたバスコだが、ディエンドは『インビシブル』を使用して、逃げていたのだった。

「まあいいや。まだ一人いるし、行こうか。サリー」

「キキッ」

バスコ達は土達を探そうとしていた。だが、その前に……

「こんにちわ。バスコ・タ・ジョロキア。」

バスコ達の前に現れたのはオルターリンであった。

「お宅なんなのさ？」

「いえいえ、私はあなたにちょっとしたお話を……貴方がお話を聞いて、とある作戦に参加してくれれば、ゴーカイジャーが持つレジンジャーキー全てと大いなる力を手に入れることができます。どうです？」

「おもしろいね。いいよ。その話……聞いてみようか」

悪が手を結ぶ中、ほむらは一人街を歩いていた。

(今の私では、オルターリートを倒せない。それにこうしている間にもまどかが……………)

魔法が通じないオルターリオンに苦戦をしているほむら。このままではいけないと思いつめていた。そんなほむらの前に……………

「やあ、久し振りだね。暁美ほむら」

「あ、あなたは……………」

ほむらの前に現れたのは白いうさぎみたいな生き物……………それは悪意というものを吸収し、ほむら達、オーズを追い詰めたインキュベーターだった。

「ど、どうして、」

「力が欲しいかい？それなら……………僕と契約して真の魔法少女になればいいんだよ。」



## 第四話 集う悪（後書き）

### 次回予告

「わたしがあなたと契約すれば、私はヤツと対抗できるの？」

「そうさ、君が叶えようとする願い。それはエントロピーを超え、鹿目まどかと同じの存在となる。」

インキュベーターからの誘いを受けるほむら。

「その子に手を出すな！」

「あなたは……確かゴーカイジャーの……」

「そんな奴の力を借りて、君の大切な友達を救えるのか？」

「やれやれ、邪魔をするなんて……折角早めに厄介な力を持っている彼女を始末しようと思ったのに……」

「ゴーカイチェンジ！」

「それなら僕を再生させてくれた彼女のために……僕も完全体となって戦うよ。」

ゴーカイシルバー vs インキュベーター

そしてゴーカイジャーとシンケンジャーに迫る魔の手

「ジョー、ルカ、ハカセ、アトム」

「マベちゃん。仲間を救いたければ……レンジャーキーを渡してもらうよ。それと今回は小細工した瞬間に殺しちゃうから」

「シンケンレッド。君の家臣を三途の川に連れて行くから。」

「くっ、」

オルターラインとバスコの恐るべき計画。その前に為す術を無くしたマーベラス達。

「このまま諦めるつもりか？仲間を助けるために動くのが……皆も守るヒーローだろ」

次回『迫る魔の手。仲間か力かの選択』

## 第五話 願い（前書き）

今回は何故か復活したキュウベエです。とはいえ、このキュウベエは……



## 第五話 願い

悩むほむらの前にあの時に倒したはずのインキュベーターが姿を現した。

「インキュベーター。何故あなたが……あなたは確か悪意に侵食されて、ライダー達によって倒されたんじゃない……」

「オルターリーンが復活させてくれたのさ。でも、僕はやつらに協力するつもりはない。協力するのなら、君のためだよ。ほむら。今の君じゃ、まどかを救うことは絶対に無理だ。でも、僕と新たな契約を結べば……」

「わたしがあなたと契約すれば、私はヤツと対抗できるの?」

「そうさ、君が叶えようとする願い。それはエントロピーを超え、鹿目まどかと同じの存在となる。」

キュウベエの言葉を聞いて、悩むほむら。今のままではどうやってまどかも救えず、オルターリーンすら勝てない。もしもキュウベエの言うとおりなら……

「……………分かったわ。私は……………」

ほむらとキュウベエのやり取りを近くのビルの屋上でオルターリオンは見つめていた。

「さあ、願えよ。暁美ほむら。そうすれば悪意はもつと深まる。そうすれば……………私達の主が復活する。」

オルターリオンが薄く笑っていた。だが、そんなオルターリオンの計画もほむらの一言で終わった。

「貴方と契約しない。」

「どうしてだい？力が手に入るのに……………」

「出来がいいみたいね。人形。私の知っているキュウベエは……………全てを何かの意志のために動いていたわ。だけど、貴方からは何の意志も感じない。これは、畏ね」

ほむらが強い瞳でキュウベエを見つめると、キュウベエは……………

「くく、さすがは暁美ほむら。まさか、僕の正体に気がつくとはね。そうだよ。僕はオルターリオンが作った人形。僕の力はどうやら彼女たちには都合がいいみたいだからね。折角……………君から力をもらおうと思っただのに……………死んでくれないかな？」

インキュベーターがそう言った瞬間、突然インキュベーターの体から紅い刃が現れ、ほむらに襲いかかった。

「くっ、」

ほむらはぎりぎりの所で時間停止させて、避けようとしたが、気がつくとも刃がほむらの足に突き刺さっていた。

「無駄だよ。君の力は僕の前では無意味だ。さあ、叶えてあげるよ。君の願いを」

ほむらは足の傷を抑えていた。このままだと無理やりキュウベエに契約されてしまう。だが、逃げられない。

「さあ、君の願いを、魂を捧げてもらうよ!」

インキュベーターの刃がほむらに襲いかかってきた。だが、

「危ない!」

突然誰かがほむらの体を突き飛ばし、赤い刃からほむらは避けきった。

「誰だい？僕のジャマをするのは？」

「あなたは………」

ほむらは自分を助けた人物を見ると、それは凱だった。凱の近くには何故か買い物袋があった。

「その子に手を出すな!」

「あなたは……確かゴーカイジャーの……」

「そんな奴の力を借りて、君の大切な友達を救えるのか？」

凱はほむらの肩を抱きながら言った。

「あんな奴より俺達スーパー戦隊の力を借りてくれ。君は一人じゃない」

「……………そうね」

凱の言葉を聞いて、ほむらは立ち上がった。インキュベーターは……

「やれやれ、邪魔をするなんて……折角早めに厄介な力を持っている彼女を始末しようと思ったのに……………」

インキュベーターは見る見るうちに体が膨れ上がり、紅い鎧をきた化物に変貌した。凱はゴーカイセルラーを取り出し、変身した

「ゴーカイチェンジ！」

「それなら僕を再生させてくれた彼女のために……………僕も完全体となつて戦うよ。」

## 第五話 願い（後書き）

短めですみません。次回はゴーカイシルバーとインキュベーターの戦いです。

## 第六話 強大な力（前書き）

今回の話で中盤の話が終わりとなります。元々最初から短めでやるつもりだったので、フォーゼの方は冬の映画を見終わってからにします。

## 第六話 強大な力

戦闘形態となったインキュベーターvsゴーカイシルバー。ゴーカイシルバーはインキュベーターの攻撃を回避し続け、少しずつインキュベーターにダメージを与えていつているが……

(なんだ?こいつ……さっきから攻撃してるのに……全然倒れる様子がない。一体どういうことだ?)

「ふふ、どうやら、僕が倒れないことを疑問に思っているみたいだね。ゴーカイシルバー。僕はね。オルターラインに作られた存在である目的を達成しない限り僕を倒すことは決して無理だ」

「オルターラインってほむらちゃんたちと同じ魔法の力が使えるんだっけ。だったら、」

ゴーカイシルバーはバックルからあるレンジャーキーを取り出し、ある戦隊に変身した。

「ゴーカイチェンジ!」

『マージレンジャー!』

ゴーカイシルバーの姿が全身金色に金色のマントを羽織った戦隊。マジシャインへと姿を変え、ランプ型の銃、マジランプバスターをインキュベーターに向けた。

「マジランプバスター!」

不規則な軌道を描きながらインキュベーターに迫る金色の弾丸。だが、インキュベーターは防御も回避することもなくそのまま攻撃を受ける。

「魔法の力を使っても無駄だ。僕を倒すのは無理だ」

「くっ、」

「下がって、コイツは私がやるわ」

ほむらは拳銃をどこからとも無く取り出すとインキュベーターに向けて発射させるが、インキュベーターは弾丸を指で受け止めた。

「いくら言っても分からないみたいだね。僕を倒すのは無理だ。それにそろそろオルターラインの計画の始動時間だ。血流陣！！」

突然インキュベーターの体が真赤に染まると見る見るうちに血の色をしたスライムに変わり、ゴーカイスルバーとほむらに襲いかかった。

「うあああああああ」

「くっくっくっく」

『計画その一、まずは戦力を削ること。ゴーカイスルバーと曉美ほむらを捕獲しました。』

「ご苦労様。私の可愛い子」

拘束された二人の前に、オルターラインが姿を現した。オルターリ



ーンは不気味な笑みを浮かべていた。

「さて、こっちは済んだことだし、次はゴーカイレッドとシンケンレッド。そしてデイケイド以外の仲間を捕縛するだけ………」と、ザンギャックからだ。」

オルターリーンは血の魔方陣を発動させるとそこからダマラスの姿が浮かび上がった。

『異世界人よ。貴様の言うとおりキャプテン・マーベラス以外の仲間たちは隙を見て拘束した。』

「仕事が早くていいわ。それじゃあ、彼らを例の場所へ。今度はバスコくんがゴーカイレッドに連絡を取らせれば、計画は最終段階よ。」

ゴークイガレオンではただ椅子に座ったままのマーベラスと浮かない顔をした丈瑠。そして土がいた。

「ちっ、あいつら、くだらない真似を……………」

マーベラスは吐き捨てるように言った。それは数分前にバスコから仲間はこちらが拘束した。返して欲しければ、レンジャーキーとゴークイガレオンとナビィを渡してもらおうよ。それと前みたいに箱の中にモバイレーツなんて入れたら、直ぐに殺してやるからそこんとこよろしくね。マベちゃん』と言った連絡が来ていた。

「どうする。マーベラス。このままレンジャーキーを渡しても、奴らは俺たちの仲間を解放しない。」

「そんな事は分かっている。だが、今回はどうやらザンギャックとあのオルターリンつうやつが関わってる。」

「だったら、ある方法がある。」

マーベラスと丈瑠が話している所に土が割り込んできた。そして土はある提案をした。

「まずはレンジャーキーを奪われずに済む方法だが、それと仲間たちを救出する方法もある。」

士は自分が考えた救出方法を一人に話すと、二人は最初驚いていたが、策はこれしかないと思い。その作戦を執行するのであった。

## 第六話 強大な力（後書き）

次回から最終戦闘が始まります。

## 第七話 一斉変身(前書き)

今回から最終決戦となります。ちなみにフォーゼとオーズ&Wは1月くらいになります。

## 第七話 一斉変身

士たちはオルターリン達、悪の連合軍が集まる荒野へとたった三人で訪れた。

「やあ、マベちゃん。約束通りレンジャーキーを持ってきたみたいだね。」

「ああ、」

「オルターリン、仲間はどうした？」

士がオルターリンに向かって言うと、オルターリンは笑みを浮かべた。

「もちろん、君の仲間たちはあそこに貼りつけておいたよ。」

オルターリンが指を刺した方を見るとそこにはゴーカイジャーの仲間たちとシンケンジャーの家臣、そして士たちのメンバーが捕まっていた。

「交換条件は覚えてるよね。ゴーカイジャー達が持つレンジャーキーと交換だ。分かってるね。キャプテン・マーベラス」

「ああ、この中に入っている。」

マーベラスはそう言って、レンジャーキーボックスを見せると、バスコは……

「小細工はしてないみたいだね。さあ、こっちに向かって投げてくれよ」

「分かった。」

マーベラスはレンジャーキーボックスをバスコたちに向かって投げた。オルターリールたちもこれで作戦完了と思っていた中………

「なっ、」

オルターリールが驚きの声を出したその理由は投げたレンジャーキーボックスが突然現れた残像に持っていかれた。オルターリールが残像が止まった方を見るとそこにはディエンドがいた。

「レンジャーキーはこの僕が貰った」

「君は、ディケイド！？まさか泥棒がいたとはね。だけど、残念だ。取引は不成立。君たちは仲間たちと一緒に死ね。いでよ、バーサーカードウコク」

血の魔方陣が突然オルターリールの前に現れ、そこからドウコクが現れた。さらには空からゴーミンとスゴーミン、そして行動隊長スサノオが現れた。

「死ね！」

オルターリールが指示を出した瞬間、ザンギヤック部隊とドウコクによる一斉攻撃が士たちに襲いかかり、士たちは爆発した。

「あははは、これで彼らの血を奪えば、私の下僕となる。残るはデ

「イエンド。お前だけだ！」

オルターリーンがレンジャーキーボックスを持つディエンドに向かつて言うこと……

「なるほどな。これで作戦完了だ。」

ディエンドがそう告げると変身を解除した。するとディエンドに変身していたのは海東ではなく、士だった。

「ば、馬鹿な。どうということだ。」

「どうもどうもどうということだ。」

オルターリーンが爆発した方を見るとそこには救出した仲間たちと一緒に並ぶマーベラス、文瑠、海東、ジョー、ルカ、アイム、ハカセ、鎧、シンケンジャー家臣たち、ユウスケ、夏海、マミ、ほむら。そして士はそこまで歩き、海東にディエンドドライバーを返した。

「さっきまでお前たちが話していたのは文字力で創り上げた分身だ。」

「お前らが影に注意を向いている隙に、俺たちは仲間を救出したということだ。」

「念のためにレンジャーキーを奪われないために、海東からディエンドドライバーを借りて、ディエンドに変身して、レンジャーキーを奪い取った。」

「くっ、そんな小細工に、もついい。貴様ら全員血の海にしてくれ



るわ！変身！」

「ということ、マベちゃん。俺もやらせてもらおうよ。」

オルターリーンは仮面ライダーブラットに変身し、バスコはラッパラッターに何個かのレンジャーキーを差し込み、吹き、黒獅子リオ、ズバーン、女シンケンレッド、デカマスターが現れた。

「よし、全員、行くぞ」

マーベラスの掛け声で全員が叫んだ。

「『ゴークイチェンジ！』」

「『一筆奏上！』」

「『変身！』」

『ゴークイジャー！』

『カメンライドディケイド！』

『カメンライドディエンド！』

全員が一斉に変身をし、そこには18人のヒーローが現れた。

「ゴークイレッド」

「ゴークイブルー」

「ゴーカイイエロー」

「ゴーカイグリーン」

「ゴーカイピンク」

「ゴーカイスilver」

「海賊戦隊」

「~~~~~ゴーカイジャー!!!」~~~~~」

「シンケンレッド・志葉丈瑠」

「シンケンブルー・池波流ノ介」

「シンケングリーン・谷千秋」

「シンケンピンク・白石茉莉」

「シンケナイエロー・花織ことは」

「シンケンゴールド・梅森源太」

「侍戦隊」

「~~~~~シンケンジャー」~~~~~」

「って、ライダー組も名乗りやりましたよっつよ」

鎧が名乗りをやらないディケイドたちについて、ディケイドは

「俺達はそのういうのは必要ない。全員、一気に行くぞ！」

## 第七話 一斉変身(後書き)

次回、ディケイドの新しい力が登場、とはいえ、ゴークイジャーメ  
インのやつになります

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3377w/>

---

海賊戦隊ゴーカイジャー vs 仮面ライダーディケイド

2011年12月11日09時50分発行